

東アジア日本語教育・ 日本文化研究学会報告

新羅大学院特別教授 藤井茂利

194

東アジア学会の理事会は例年2月末にしていたが、20年はコロナ禍の影響を受けた。世の報道では中国、ヨーロッパの或る国などにその罹災者が増えており、日本でも外国からの入国者に14日間の待機外出禁止の処置がなされたように記憶するが、正確な記憶ではないこの「14日間」は韓国からの理事には事実上の「入国禁止の処理」である。従来は土曜日来日夕方から理事会をして一泊翌日曜日帰国していた。「14日」も留め置かれるなどとてもない事である。

従来理事会では、

①学会誌に載せる論文内容について、

審査内容(掲載可冊数、掲載不可冊数報告とその理由説明)

②会計報告(収支決算書を作製、会誌印刷費40万円は特別価格、韓国事務援助費など)の説明、質問、

③人事(理事として学会運営に参加してもらう会員が居るので推薦する、理事辞退など)

④次の学会について、

イ、開催校決定

ロ、発表希望申込 5月

末まで

ハ、レジュメ提出 6月

末まで

ニ、懇親会出欠 6月

末まで

韓国事務局までメールで連絡

⑤その他(例、会計決定など)

今まで大凡このような事が理事会で話されていた。

何時も話題になるのが②の中

の学会誌の印刷代のごことで日本で印刷業者に依頼すると凡そ80万円くらいになると言うことであった。韓国の印刷事情のことは良く判らないが、ともかく40万円で約束が出来るようにして理事会では20余年の間、同一値段であるので問題にはならなくなった。

コロナの事情は2月になってもあまり変わらなず3月末に会を延ばす提案を急処崔光準副会長に電話して了解された。一ヶ月後には事情は好転しているのではないかとの希望の観測で現代の医学の進歩を信じていたからである。

ところが大学医学部に所属

している「感染予防学」専攻の方々が毎日のようにTVに出て話をしているがコロナの予防には一向に効果がなく感染が広がるばかりであった。

かくして2月も過ぎようとする2月29日古事記学会の事務局から拙稿『上代語の仮名』の印刷ゲラが届いた。3月13日迄に校正ゲラを事務局に返却するようにとのメモが入っていた。

コロナの勢いは増しているが古事記学会も勢いを増している、という感じを受けた。閏年の2月はかくして終わったが、実は此の拙論は前年、19年6月8日の古事記学会全国大会で講演したものの一部分である。

『古事記年報六十二号』に講

演の内容とを載せるから論文形式にして出して欲しいとの要望があったが、大した内容の講演でもないの『古事記年報』にだすのを断ったが、従来講演内容を載せる仕来りになっているから是非に、と言われて止むを得ず引き受けたものである。

19年6月18日から原稿の下書きを始めたが講演内容①「部」漢字の読み、②「品」漢字の音価、③記紀の仮名使用の三項目の中の③に付いてのみ記すことにした。①②の問題については機会があれば活字発表をすることにした。

約半月後の7月3日に200字用紙50枚で完結としたが上代語のア音、カ音、ナ音、ラ音の漢字の用法にサ音、タ音、マ音の漢字を加えて論じた。以前述べたことがあるが、例えば、「ア」のある漢字「阿」は百済で「安」は新羅で用いられて区別されている。「カ音」では「加」は百済で、「可」は新羅で多用される相違が見られる等の論文で7月8日に古事記学会事務局に送り、7月18日に論文

受け感謝する旨の書簡を頂いた。それから約半年たった2月29日のゲラ受け取りである。4月3日に再校を終え5月30日『古事記年報六十二号』と抜刷30部が送られてきた。コロナが猛威を振るう中で、是に負けない学問の成果であった。

3月に入つてコロナの感染者が増える一方、人の集まる例えばスポーツセンターなどは営業中止の勧告がその筋から出されるようになった。東アジア学会も理事会は中止することに決めた。

TVに出て病状を説明解説する方の肩書きも何時しか「感染予防」の名は出なくなった。一日に100人を超す感染者が出るような地域も稀でなくなっていた。韓国でもソウル、釜山でコロナの感染者が急増して入国する外国人に対して14日の隔離政策が徹底される状態になってきた。日本も会合、イベント、3名以上の会食禁止令が出るなど「コロナ」が世界に蔓延、東アジア学会も「コロナ」感染を避けるため今年には中止することになった。